

# キさんいんラリ

★  
春号

特集 山陰うまいもの探訪記  
大森町  
日帰り散歩  
春野菜を愉しむ  
美食家たちを魅了する11軒

山陰  
大人のキラリ旅―名探偵コナンの聖地  
北栄町を旅する

第2特集  
小泉八雲の妻  
孝女セツ夫人の素顔

味  
モノ  
いいね

山陰の匠を探す  
真に人間らしい  
社会を志した文学者  
生田長江

58  
2025

大人  
大人のキラリ旅―名探偵コナンの聖地  
北栄町を旅する

山陰の匠を探す  
真に人間らしい  
社会を志した文学者  
生田長江

味  
モノ  
いいね

山陰  
大人のキラリ旅―名探偵コナンの聖地  
北栄町を旅する

第2特集  
小泉八雲の妻  
孝女セツ夫人の素顔

山陰の匠を探す  
真に人間らしい  
社会を志した文学者  
生田長江

58  
2025

大人  
大人のキラリ旅―名探偵コナンの聖地  
北栄町を旅する

山陰の匠を探す  
真に人間らしい  
社会を志した文学者  
生田長江

味  
モノ  
いいね

山陰  
大人のキラリ旅―名探偵コナンの聖地  
北栄町を旅する

第2特集  
小泉八雲の妻  
孝女セツ夫人の素顔

山陰の匠を探す  
真に人間らしい  
社会を志した文学者  
生田長江

58  
2025

大人  
大人のキラリ旅―名探偵コナンの聖地  
北栄町を旅する

山陰の匠を探す  
真に人間らしい  
社会を志した文学者  
生田長江

味  
モノ  
いいね

山陰  
大人のキラリ旅―名探偵コナンの聖地  
北栄町を旅する

第2特集  
小泉八雲の妻  
孝女セツ夫人の素顔

山陰の匠を探す  
真に人間らしい  
社会を志した文学者  
生田長江

永遠のいま

2025年4月18日(金)～6月16日(月)

柚木沙弥郎

ゆのきさみろう

い  
ま  
の  
い  
ま

開館時間：10:00～日没後30分  
(展示室入場は日没時刻まで)

休館日：火曜日  
(4月29日、5月6日は開館)

主催：島根県立美術館、NHK松江放送局、  
NHKエンタープライズ中国、TSKさんいん中央テレビ  
山陰中央新報社、SPSしまねグループ  
後援：朝日新聞松江総局、毎日新聞松江支局、読売新聞松江支局、  
産経新聞社、中国新聞社、新日本新聞社、島根日日新聞社、  
BSS山陰放送、日本海テレビ、エフエム山陰、  
山陰ケーブルビジョン  
制作協力：NHKプロモーション

島根県立美術館

〒690-0049 島根県松江市袖師町1-5  
Tel.0852-55-4700 FAX.0852-55-4714  
<https://www.shimane-art-museum.jp>

雑誌 87649-03  
今井印刷株式会社



4910876490354  
00818

© Greenfields 2025  
Printed in Japan

Yunoki Samiro: The Eternal Now

(公鳥) (原約) 1992年 坂本三三美術館蔵

定価 900円

定価 900円  
本体 818円

Greenfields



山陰の匠を探す

真に人間らしい社会を志した文学者

# 生田長江

日本が急速に近代化へ向かった明治から大正期、おもに翻訳・評論といった分野で新たな文学の扉を開いた鳥取県出身の生田長江。女性かひとりで生き抜くことが困難な時代、女性の社会進出をいち早く促し、多くの若き文学者を見いだし育てた。自身もハンセン病と闘いながら、弱き人々が人間らしく生きられる社会を志した社会活動家でもあった。昨年、長江をモデルにした小説を出版した松本薫さんが、生田長江の軌跡を追いつつ、何者であったかを探ります。

文 松本薫

撮影 岡垣孝志

協力 白つじの会

イラスト すきはらみきを

根雨の町を流れる板井原川のほとりに立つ。生田長江は14歳のとき、この流れをさかのぼって大阪へ出た。向かいには根雨神社。



## 忘れられた文学者

ちようこう

# 生田長江とは、何者だったのか



森 鷗外

夏目漱石

小 泉八雲が没した明治37年9月、与謝野晶子が日露戦争に出征中の弟を思う詩「君死にたまふことなかれ」を発表し、一部の評論家から「非国民」と非難された。当時22歳で、東京帝国大学哲学科の学生であった生田弘治は、晶子の詩に賛同し、夫の与謝野寛らが抗議を行う場に参加した。

その2年後、文芸評論家として注目された生田弘治は、上田敏から「長江」の号を贈られる。訳詩集『海



大阪の桃山学校時代。後列左が長江。

潮音』で知られる上田敏は、小泉八雲がその英語力を「二万人に一人」と絶賛した愛弟子であり、八雲の後任として東京帝大の教壇に立っていた。

生田長江の名を知る人は多くないだろう。明治15年(1882)に鳥取県日野郡貝原(根雨の隣村)に生まれ、明治後半から昭和前期にかけて、おもに翻訳家・評論家として活躍したが、現在その名前を文学史の中に見ることはまれだ。

しかし、忘れられてよい人物ではない。長江は夏目漱石門下の一人であるが、森鷗外とも交流があり、与謝野晶子夫妻とは親しい友人であった。翻訳・評論のみならず、戯曲・詩・小説も書き、同時代には「森鷗外と夏目漱石と上田敏と、この三者の特色を合わせ持っていて、鮮やかに一家の風格を築き、文芸批評壇の最高位を占めている」と評されていた。



明治40年、25歳で日野郡江府町出身の亀田藤尾と結婚した。



学生時代の長江(左側)。一高から東京帝大に進む頃と思われる。

## 雑誌『青鞥』の生みの親



伊藤野枝 (1895~1923)  
福岡県生まれ。高等小学校卒業後、叔父を頼って東京の上野高等女学校に編入。教師の辻潤と同居しながら『青鞥』に加わり、編集責任者となる。のち無政府主義者の大杉栄と恋愛関係になり、ともに活動するが、関東大震災後の混乱の中、憲兵隊によって大杉とともに殺害された。



平塚らいてう (1886~1971)  
本名・平塚明。東京生まれ。父は高級官僚で裕福な家庭に育つ。日本女子大卒業後、女子英学塾(津田塾女子大)や成美女学校(長江が教員)で学び、生田長江に師事する。『青鞥』をきっかけに社会運動に目覚め、女性の自由や参政権獲得を訴える。戦後は婦人運動・平和運動の先頭に立ち、尽力した。

また封建制を残したまま近代化を急ぐ日本において、民衆や弱い立場の視点に立ちつつ言論活動を続けたことの功績は、決して小さくない。私は昨年、生田長江をモデルにした小説『火口に立つ』を出版した。私なりにではあるが、長江という人を紹介してみたい。

明治44年(1911)9月に創刊された女性文芸雑誌『青鞥』は、日本のフェミニズムの始まりと言われている。「元始女性は太陽であった」で始まる平塚らいてうの「創刊の辞」は有名だが、家父長制の下で家や男性に抑圧されていた女性たちが、小説や短歌という形で自らの声を上げ始めたのだ。

その創刊にあたり、平塚らいてうの背中を押したのが生田長江である。「女性の書き手はもつと世に出るべきだ」と考える長江は、女性を対象に「閨秀文学会」という講座を開いていた。聴講生であつたらいうは、長江の親友・森田草平と心中未遂事件を起こして世間から非難されていたが、らいてうの類まれな才能を見抜いていた長江は、「その力を社会のために使いなさい」としきりに説得したのである。『青鞥』という名も長江が付け、発刊に至るまでのさまざまな面倒をみた。

『青鞥』は多くの女性の共感と賛同を得た。しかし、当時は「良妻賢母」たらんとすることが強く求められた時代である。パッシングも激しかった。『青鞥』に集う女性たちは「ふしだらな女」というレッテルを貼られ、女学校や女子大は生徒たちに読むことを禁じた。らいてうの家には

石が投げつけられたという。しかし、彼女たちは非難や攻撃の中で成長し、『青鞥』は文芸誌から女性解放誌へと脱皮していく。編集責任者は平塚らいてうから伊藤野枝に代わり、貞操論争や廃娼論争、母性論争など、当時タブーとされていた問題について論じ、世に問うていくのである。

生田長江は、創刊から1年半ほどで『青鞥』から手を引くことになるが、その後も女性の文芸活動にはさまざまな援助を行った。長江が見いだした育った女性として、女性史研究家の高群逸枝や、『橋のないう川』を書いた住井すゑなどがいる。自身も「婦人論」や「家庭論」を多く書き、女性を個人として尊重することや、家庭は男女の愛で成り立つことなどを主張した。男性の側からのフェミニズム推進者だったと言えるだろう。

平塚らいてうは『青鞥』廃刊後に女性運動団体を作り、市川房枝らとともに婦人参政権を求める活動を展開する。高群逸枝とも友人であったし、第二次世界大戦後は長江の晩年の弟子であった浜田糸衛とともに、女性平和運動の中心を担う。女性運動史の観点からも、長江の存在は見逃せない。



創刊から1年後の夏、茅ヶ崎海岸で『青鞥』同人とくつろぐ長江。麦わら帽子を被った長江の隣が平塚らいてう。右端が妻の藤尾。





大正5年、本郷の自宅にて長江(34歳)と長女のまり子。この翌年に妻の藤尾が病没する。

## 大正デモクラシーと資本主義批判



カール・マルクス

### 生

田長江の最も大きな仕事は、ドイツの哲学者フリードリヒ・ニーチェの著作を、日本で初めて完全翻訳したことだろう。日本の近代化において、翻訳が果たした役割はまことに大きい。長江をはじめとして多くの文学者や学者が、西洋の最先端思想や知識を日本語に訳し、新たな時代を切り拓いていったのである。

長江はニーチェの翻訳に明治末から昭和初期まで十数年の歳月をかけているが、自身が最も活躍したのは、その

間の大正時代であった。「大正デモクラシー」という言葉に象徴されるように、民衆が権利や自由を求めて大きく動いた時代である。

長江は、民衆の声を代弁する政党政治をめざして、馬場孤蝶(自由民権運動の流れをくむ学者)を衆議院選挙に立候補させ、資金を作った。社会主義者の堺利彦や大杉栄らとも親しく交わり、堺利彦が衆議院選挙に出たときには、街頭で応援演説をぶった。多くの民衆が参政権を持たない時代で

あり、二人は落選したが、この頃の長江は社会活動家でもあった。  
大正期は造船や紡績などの大工場が増え、資本主義が急速に発展した時代である。労働者が劣悪な条件下で働かされているのに対し、長江は「人間が機械以下に扱われている」として資本主義を批判した。「最初は人が金を使い、中ほどは金が金を使い、最後は金人が人を使う」と言って、資本(金)に支配された社会も批判している。

からである。何事にも強気で進む長江も、この攻撃にだけは黙するしかなかった。  
大正12年(1923)に発生した関東大震災をへて、長江は西洋を模倣してきた「近代」を否定し、東洋や農村への回帰を主張し始める。同時に、マルクス派社会主義も徹底的に批判し始める。西洋の文学や思想を数多く翻訳し、文明批評を書いてきた長江に何があつたのだろう。「資本論」の中断は一つの契機かもしれないが、「近代化」の先頭を走ってきたがゆえに、西洋的な思想は人間の幸福につながらないという思いが強まったのかもしれない。  
40代半ばからの長江は、宗教(仏教)の探求に向かっている。



フリードリヒ・ニーチェ (1844~1900)

ドイツ・プロイセン王国出身の思想家。「ツァラトゥストラはかく語りき」「人間的な、あまりにも人間的な」など多数の著書がある。鋭い批評眼で西洋文明を批判、「超人」「永劫回帰」「力への意志」「デカダンス」「ニヒリズム」など独自の概念によって新たな思想を生み出し、それ以後の文学・哲学に多大な影響を与えた。

## ハンセン病との闘い

### こ

んにち生田長江を語る際、宿病であったハンセン病を避けることはできない。かつては「らい病」と呼ばれ、厳しい差別にさらされた病気である。

長江は20歳前後で発症を自覚したと思われる。「リユーマチ」で通っていたが、外貌の変化を伴うため、近しい人たちは気づいていただろう。それで離れていく者もいれば、変わらず付き合う人もいた。

東京帝国大学赤門前の喜福寺で執り行われた長江の葬儀。多くの花輪が並ぶ。



全患者収容、絶対隔離の政策が始まるのは、満州事変が勃発した昭和6年(1931)からである。無らい県運動が広がり、患者は各地の収容施設に送られた。戦後は薬ができて治る病気になったにもかかわらず、平成8年(1996)に「らい予防法」が廃止されるまでの長い間、元患者や親族は差別に苦しんだ。それがどれほどの苦しみであったか、察するにあまりある。

長江は、関東大震災後の40代半ば頃から歩行が困難になり、ペンを持つことも難しくなった。執筆はおもに口述筆記で行い、手にスプーンを括りつけて食事を取っていたという。50歳頃には視力を失ったが、執筆意欲は衰えず、釈迦の生涯を描いた「釈尊伝」を書き続けた。

「私がボロくずのような体で宗教に取

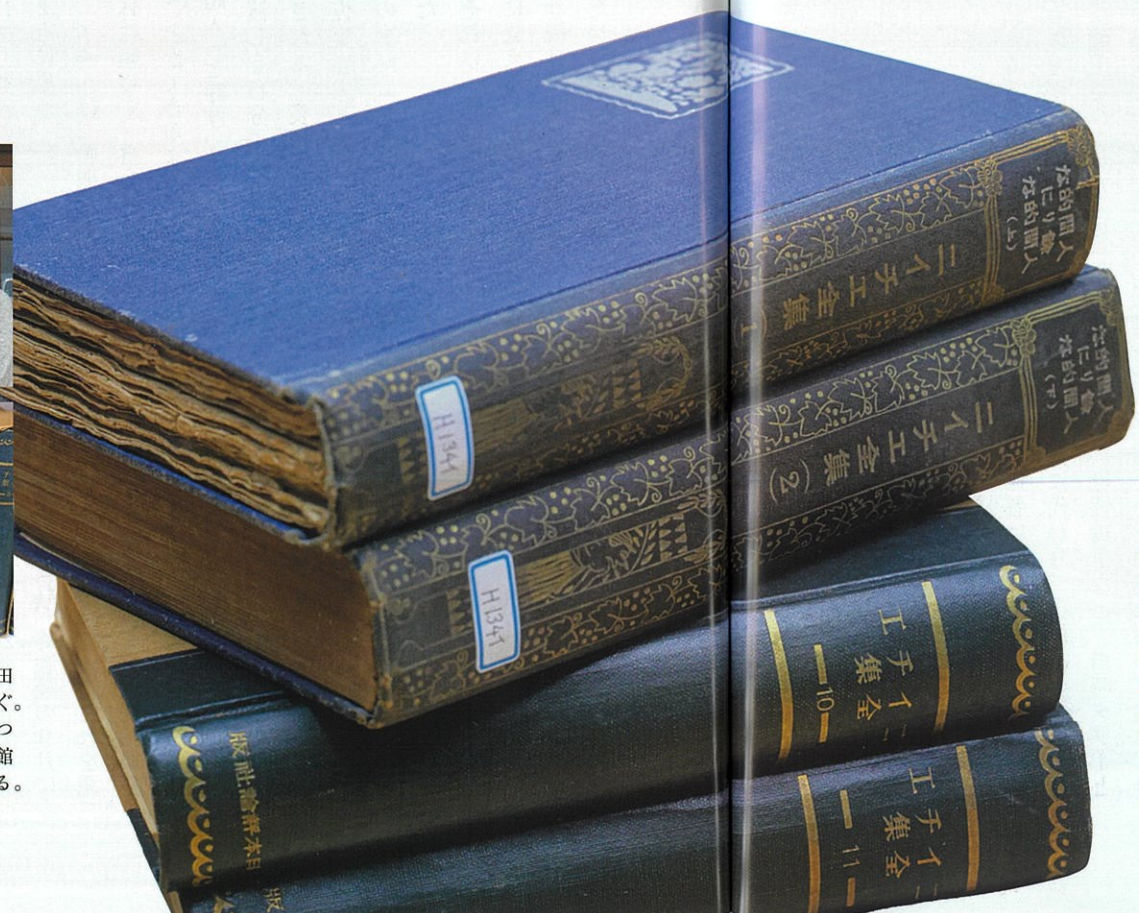
り組むのは、たとえ理想の社会ができたとしても、なおそこからこぼれる人がある。宗教はその人たちのためにあると考えるからです」

晩年、長江は門下生にそう語ったというが、自身が「社会からこぼれた」悲痛さと、それでも他者を救いたいという強靱な精神を感じる逸話である。病気が進んでも、長江は自分を投げ出したり諦めたりしなかった。

昭和11年(1936)1月、生田長江は東京の自宅で54歳の生涯を閉じる。妻の藤尾は大正6年に病没しており、喪主は一人娘のまり子が務めたが、門弟や文壇関係者が何百人も焼香の列に並んだ。

昭和33年(1958)、日野町根雨駅前の延暦寺境内に、長江の顕彰碑が建立された。伯耆町二部出身の彫刻家・辻啓堂の手によるもので、長江の肖像と「一の信条」と題する言葉が刻まれている。

建立資金を作るにあたっては、門弟の佐藤春夫をはじめ、平塚らいてう、高群逸枝、尾崎士郎、川端康成、堀口大學、吉川英治ら多数の協力があつた。病気のために「孤高」ではあつたが、多くの文学者から認められていた証であろう。



左/延暦寺の境内に建立された生田長江顕彰碑。根雨駅から徒歩すぐ。右上下/生田長江を顕彰する「白つづじの会」の皆さん。日野町図書館には長江の著作が収蔵されている。







## 長江とは何者だったのか

### 生

田長江は14歳で故郷を出て大阪へ行き、さらに東京に移って第一高等学校から東京帝国大学へ進んだ。おそらくその頃は、自分は何者にもなれるという自信に満ちていたことだろう。しかし、病気発症の自覚で人生は暗転する。ならば、文筆で社会を変革したいと思ったのではないだろうか。

長江は文壇の主流ではなかった。むしろ「私は正直な喧嘩をしたい」と言って、主流とされる人たちと対立することが多かった。その代わり、才能を認めた者は惜しみなく応援して世に出した。そうした生き方の背景には、長江が生涯かけて翻訳に取り組んだニーチェの思想があるように思う。

ニーチェは、善悪や美の価値基準を外に頼らず、自分自身で打ち立てることができるようになった存在を「超人」と呼び、人間から超人への橋渡しを自分の仕事と考えていたとされる。長江が弟子の生田春月や佐藤春夫と暮らした根津神社近くの家は、「超人社」と名付けられていた。

それは、孤高で孤独な生き方のように見える。しかし長江は社会と関わり続けたし、人を育てることも好きだった。内弟子から世に出た生田

春月は大正期に詩人として活躍し、佐藤春夫は小説家・詩人として大成した。佐藤は、小泉八雲の長男・一雄ともかなり親しかったという。長江が有島武郎と作った「初心会」には、鳥取県出身の文学青年が多く集まったし、「冬日会」という会に集まる若者たちも可愛かった。

生田長江とは何者だったのかを一言でいうことは難しいが、哲学者の三木清は長江への追悼文の中で、「生田氏は文学者にして思想家であつた。これは我が国では類まれなことである」とし、「生田氏の本質はニーチェ的なヒューマニズムにあるのではないかと思う」と述べている。三木清は昭和20年に治安維持法違反で逮捕され、終戦後の9月に獄中死した人物であるが、これを読んだとき、掴みかねていた長江の姿が見えた気がした。長江は、真に人間らしい生き方と、それが可能な社会を求めたのではないだろうか。

没してからまもなく90年。長江が挑み続けた課題は今も私たちの前に残されている。ばかりか、いっそう混迷が深まっているようにも思えるが、14歳までを過ごした根津界隈を歩くと、静かな山あいの町に長江の志が感じられるような気がするの



明治・大正・昭和にかけてヒューマニズムを貫いた、文学者にして思想家の生田長江。その長江をモデルにして書かれた歴史小説『火口に立つ』の書評の一つを紹介する。

文／平石結惟（鳥取大学地域学部3年） 撮影／岡垣孝志

## 『火口に立つ。』から受けとった、私たちにへのバトン

『火口に立つ。』は、鳥取県出身の小説家・松本薫によって書かれた、生田長江を題材とした作品である。大正デモクラシーや関東大震災など、激動の時代の中で文士として社会と対峙した生田長江を、一人の女性である律の目線で描いている。私は、この作品を大学の授業で知った。また、歴史小説というジャンルにも初めて触れ、授業の最後のレポートでは歴史小説における架空の人物の役割を中心に考察した。というのも、この作品の主人公の律が、生田長江と

平塚らいてうなどの歴史上の人物ではなかったことが、気になったからである。私はこの作品が、単なる過去を記録したものではなく、今生きている私たちに何かしらのメッセージを残すために、律を描いたのではないかと考えた。物語の始め、律は自分自身に学がないことに後ろめたさを感じていたが、長江や長江の妻である藤尾など多くの人に出会い、様々なことを学ぶ。そしてその学びが律の宝となり、さらに社会を生きるための武器となっていく。

終章では、物語の語り手のバトンが、律から律の子ども世代へと渡される。私は、そのバトンが最終的に渡されたのは、読者である私たちではないかと考えた。律のよう



『火口に立つ。』  
著者／松本薫  
発行／小説「生田長江」を出版する会／1,980円  
お問い合わせ／日野町図書館内「出版する会」事務局 (0859-72-1300)





# 生田長江ゆかりの地

ハンセン病と闘いながら人間らしい社会を志した生田長江。昨年12月、ハンセン病撲滅を目指して設立された笹川保健財団の「Sasakawa看護フェロー」の皆さんが、長江の故郷である鳥取県日野町根雨を訪ねられた。たたら製鉄や出雲街道の宿場町として栄えた古き町並みに残る長江ゆかりの地を巡り、松本薫さんとのディスカッションが行われた様子を紹介する。

文 松本薫 撮影 岡垣孝志 イラスト すぎはらみきお 協力 笹川保健財団、白つじの会



## 1 オシドリ観察小屋



美しいオシドリを  
間近で観察できる施設

根雨の町を流れる日野川には、秋から春にかけて多数のオシドリが飛来し、オシドリ観察小屋からは、多いときでおよそ800羽ものオシドリを間近で観察することができ。早朝（夜明けから午前8時頃）と夕方午後4時頃（日暮れ）が、観察にベストの時間帯。オシドリは日野町の鳥。鳥取県の鳥になっている。

【開館】7時～17時（1月1日～3月31日）  
【休館】第2、第4水曜 12月31日、1月1日  
【入館料】300円



的な価値判断で排除されるのは非常に怖ろしいことだと感じます」という記述があり、真摯に向き合ってくださいったことを改めて感じた。

ディスカッションの終わりに保健財団の喜多悦子会長が、「日本では、近代史を知らない人が多い。これから海外へ行くにあたって、自国の歴史、とくに近代の歴史を学んでおくことが大事」と話された。

そういえば私も、高校の日本史では幕末あたりまでしか教わらなかった記憶がある。『火口に立つ。』で描いたのは、生田長江を中心とした近代の一部だが、現在の社会を考える一助となったのであればうれしい。長江が挑み続けた課題は、今も私たちに残されている。若い看護フェローさんたちの活躍を心から期待し、応援したい。

2 024年12月16日、笹川保健財団の喜多悦子会長と看護フェロー6人が根雨に来られた。看護フェローとは、保健財団からの奨学金を得て、これからアメリカ・カナダの大学院で学ぶ予定の方たちである。

きっかけは、私が書いた『火口に立つ。』を喜多会長が読み、看護フェローの方たちにも勧めてくださったこと。笹川保健財団は、ハンセン病の撲滅を目指して50年前に設立された財団であり、現在は地域の健康を守る看護師支援にも力を入れている。一行は生田長江の故郷を訪ねるとともに、日野病院の地域医療を学ぶために来訪されたのだ。

当日は早朝にオシドリを観察し、長江の顕彰碑が建つ延暦寺へ案内した。延暦寺は、高等小学校を終えた長江が、和尚さんから漢籍などを教わったゆかりの寺である。その後、

日野町図書館で長江の著作や遺品などを見学、日野病院で地域医療の取り組みについて聞いたあと、「たたらや」で美味しい蕎麦をいただいた。

食べながら話を伺うと、6人も現役の看護師・助産師・保健師とのこと。どなたも、広い視野と深い志を持った女性であると感じた。

食後は「たたら楽校」根雨楽舎に場所を移し、生田長江をめぐっての意見交換。フェミニズムやハンセン病差別などについて、一人ひとりから質問や意見を述べてもらい、濃密なディスカッションとなった。翌日メールで届いた感想には、「生田先生がハンセン病を患いながらも、女性解放に貢献された力強い方であることがわかりました」といった声や、「人間だれしも弱い部分を持ち合わせており、一義

## 4 延暦寺

曹洞宗の寺院。高等小学校を終えた生田長江は、将来の方針を定めかね、松本大典和尚から漢籍の講義を受けながら1年半ほどを過ごした。境内の入り口に、長江の姿と「信條」を刻んだ「生田長江顕彰碑」が建立されている。



## 5 近藤家住宅

近藤家は、江戸時代中期から大正時代まで「たたら製鉄」で栄え、製鉄業の後は林業などを営むほか、町の産業発展や文化振興に寄与した旧家である。



1864年建築の主屋は、早い時期に建てられた2階建て町屋として学術的に重要であり、鳥取県の有形保護文化財に指定されている。「火口に立つ」にも登場する。内部は非公開。

## 6 たたら楽校根雨楽舎

明治初年の建築で、かつては「出店近藤」と呼ばれ、たたら製鉄による鉄の商いをしていた趣のある町屋。現在は「たたら楽校根雨楽舎」として、たたら製鉄や近藤家の歴史を紹介している。裏庭には「都合山たたらの高殿模型」を展示する建物がある。見学希望の際は左記に問い合わせ。

【問い合わせ】日野町商工課内  
伯耆たたら顕彰会事務局  
【電話】0859-72-0249

## 7 本陣の門

出雲街道と日野往來が交差する根雨の町は、かつて大阪へ向かう旅人や大山詣での人たちでにぎわい、宿場町として栄えた。江戸時代には、参勤交代の際に松江藩主が泊まる本陣宿があり、その門が残されている。本陣宿を務めた梅林家の取り壊しに伴い、現在の場所に移されたものであるが、風格ある佇まいが往時をしのばせる。



## 8 旧山陰合同銀行根雨支店

昭和4年（1929）の洋風銀行建築であり、往時の根雨の隆盛を物語る文化財でもある。近藤家の設立した根雨銀行が山陰合同銀行の前身の一つであることから、たたら文化歴史を語る上でも重要な建物。2018年、根雨支店の営業終了に伴い、建物は日野町に無償譲渡された。鳥取県の「県民の建物100選」に選ばれている。



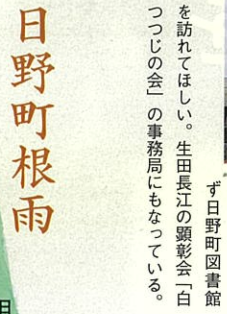
## 3 日野町図書館

日野町役場に隣接する日野町図書館は、生田長江の著作や関連書物、写真や遺品を収集・保存している。生田長江に興味を持たれたら、まず日野町図書館を訪ねてほしい。生田長江の顕彰会「白つじの会」の事務局にもなっている。



## 2 根雨神社

日野川沿いの森の中に建つ根雨神社は、通称「祇園さん」と言われ、社叢は鳥取県の天然記念物に指定されている。神社に通じる橋は昭和8年（1933）に架けられた。欄干には唐金鍍金珠が取り付けられ、橋の両端には石灯籠などもあり、「祇園」の名にふさわしい、風情ある景観を作り出している。



## 金持神社

金運・開運を求めて多くの人が参拝

全国で唯一の、縁起のよい名前を持つ神社。その昔には「黄金にも勝る」と言われた鉄の産地であり、「鉄山を持つ村」という意味で「金持」になったと伝えられる。金運・開運を求めて、全国から多くの人が参拝に訪れる。

